

あらえびす賞

善の集積

白井 明子

能うかぎり善を行ない

何にも優りて不羈^{ふき}を重んじ

たとえ王座の側^{そば}にてもあれ

絶えて真理を裏切らざれ

ベートーベン（一七九二年記念帳）

ベートーベンのことを「楽聖」と呼んで神格化したり、天才作曲家としてあがめたり、はたまた数々の疾患を患った病氣の人として扱ったりと、生の彼を知らない後世の人々はとかく彼のことを好奇の目で評しがちだ。けれど私は、この類稀なる才能の持ち主は神に愛され音楽を司る女神に見込まれて人々に希望と勇気を音を通して与えるように負託を受けてこの世に生を受けた一人の人間の貴い生涯としてルドヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンを捉えたい。一人の人間として恋をし、病に苛まれ、友人や良き仲間^{とも}に囲まれ、インスピレーションや天啓に従い自らの内的良心と善良なる精神に忠実に仕えて音楽と真摯に向き合ったその魂に対し、心からの尊敬と敬意を以ってこの感想文を書かせていただく。

私は四歳からピアノを始めて長く音楽に触れてきた。ベートーベンのソナタアルバムはほぼ全て弾いたが、他に演奏したバッハやモーツァルトに比べると私にはベートーベンが天上の神々が彼に主題を与えてそれについて詳細を小説を描くように物語らせて音楽するよう啓示しているようにさえ感じるほど、心身に善なる意思を感じながら弾いていた。激しい感情を音符に化体させることの多い彼だったが、その中でも全体的に小春日和のような穏やかでたおやかでやわらかな陽光の下でその疲れ切った魂を束の間休ませるかの曲想として私の胸を打つ作品がある。それが「交響曲第六番、田園」である。

この作品は一八〇七、一八〇八年頃作曲され一八〇八年十二月二十二日の演

奏会で初演された。彼は自分自身の懊悩、逡巡、悔悛、自問自答を曲に乗せることも多いが、そしてそれゆえに気分が変わりやすく激しい気性と捉えられがちだが、一人の女性、テレゼ・フォン・ブルンスヴィックと恋愛し婚約した頃に作曲されたのが「田園」だった。ロマン・ロラン著『ベートーヴェンの生涯』によると、「この深い静穏も永続する運命を持たなかったが、それでも恋愛の幸福な影響力は一八一〇年に至るまでつづいていた。彼の天才からその頃の最も完璧な幾つかの果実を作らせたところの自己統御のちからを確かにベートーヴェンはあの恋愛に負っている。すなわち、略々夏のひと日の神々しい夢想である『田園（第六）交響曲』が、その果実であり」と記されている。また、一八一五年に彼を識ったチャールズ・ニートによれば、「ベートーヴェンほどに花や雲や自然の万物を完全に愛する人間を見たことがなかった。」ベートーヴェン自身も書いている。「私ほど田園を愛する者はあるまい」と。「田園の主題」には彼の好んだウィーン郊外の田園での暮らし、散歩が表現され、情景的描写のみならず「そこでは絵画ではなく感情が描かれる」「田園生活でのいくつかの感情が描かれる」と彼自身がメモ書きしている。へ長調らしい明朗さ、のどかさ、憩いの安らぎが際立つ。例えば交響曲第五番であれば、タイトルの「運命」は後世に付けられたものだが、「田園」は彼自らが付けたものだ。個人の内的平和、心の安らぎを見出して言葉で語るかのような楽曲。大自然を心の安息所とし、自然の壮麗、静寂、日光の下であるいは雨の降りしきる中、世界が輝きを取り戻しその中で彼は無邪気に軽やかに微笑む。この曲を聴く者は皆、日常の雑踏から離れて雄大に眼前に広がる牧歌的風景の中に身を任せほころんだ心身の痛みを束の間、癒す。ピッコロの奏でる太陽の光がまろやかにキラキラとこぼれ落ちる音。オーボエの奏でる遠く遙かなる彼方まで清かに吹き渡る風の音。ホルンの奏でる神々が人間を祝福し讃える神託の音。「田園」には沢山の梵音が散りばめられている。

ベートーヴェンの『手記』にはこう記されている。「田園交響曲」は絵画的描写ではない。田園での喜びが人の心に惹き起こすいろいろな感じの表現であり、それに付随して田園生活の幾つかの感情が描かれている」と。私はベートーヴェンが生きた良いことも過酷であったことも丸ごと一つの人

生、一人の人間の足跡としてこの一人の音楽家の人となりこれから味わっていききたいし、人生に起こる全ての事を「善きこと」と捉えたいと彼の生きざまに学んだ。彼は手記の中でこう語る。「田園では一つ一つの樹木が私に向かって「神聖だ、神聖だ」と語りかける」「森の中の歓喜の恍惚！だれがこれら全てのことを表現しようぞ？」と。音楽は善の集積だと私は思う。美しいものを見たい、聴きたい。なぜならそれが私という人間を形作るからだ。

曲名 交響曲第六番 田園
作曲 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

審査員講評

あらえびす賞感想文について

ピアノ・ソナタをほぼすべて弾くなどベートーヴェンの音楽に親しんできた筆者が、とりわけ胸を打たれる作品である「田園交響曲」。ベートーヴェン自身や、ロマン・ロランなどの言葉を引用しながら考察し、「音楽は善の集積」という音楽観を綴っています。

教育長賞

小フリーガと紡ぐ私の物語

中野 桐華

冒頭の旋律が流れてきた途端、背中がゾクゾクするような感覚を覚える。重厚感のある音はこれから何かが起こりそうな、ドラマチックな展開を想像してしまう。

私がヨハン・セバスティアン・バッハの「小フリーガ短調」を知ったのは中学二年の時の音楽の授業だった。音感ほぼゼロの自分にとって、クラシック曲は敷居が高くつつきにくいというイメージがあったが、初めて耳にしたパイプオルガンの音色ははっとするほど神秘的で美しかった。教科書には壮大なパイプオルガンの写真が見開きで載っており、対照的に、所在地と思われる教会の写真が下に小さく載っていたのが印象的だった。ただそのときは表面をなぞっただけの出会いで、その後曲に“再会”したのは大人になってから、パソコンや携帯などで気軽にクラシックを聴けるようになってからだった。

改めて聴いてみると、深いところを彷徨うようなハスキーな部分があったり、鈴の音のようなきらびやかな部分があったりと異なるリズムが重なり合っていることに気付いた。それでいて一つの曲としてまとまった感じがするのは、冒頭の旋律が速さや強弱を変えつつ繰り返されるからだろうか。そこを軸にして紡いでいくのは、一体どんな物語なんだろう。

ふと、ある情景が頭に浮かんでくる。十字架のそびえ立つ、白い大きな建物。赤や青、黄色の絵の具を散りばめたようなステンドグラス。吸い込まれそうなほど高い天井。緩やかな曲線を描く柱。ずっと眺めていたくなるほど魅惑的な空間のはずなのに、なぜか切ない。

思い当たる理由は音楽の授業よりもずっと前、幼少の頃にあった。父の転勤に伴い、引っ越した先で通うことになったのはカトリック系の幼稚園だった。毎朝、園の隣にある教会でお祈りをするのが日課になっており、キラキラしたステンドグラスや壁際に飾られた西洋人形など子供心に興味をそえられるものばかりで、何より教会の荘厳な雰囲気は、静かな空間を好んだ自

分にとって居心地のいい場所だった。

しかしそんな日々は一年で終わりを迎えることになる。幼稚園から帰宅したある日、翌日に引越すことを告げられた。

穏やかな引越しでないことは、大人たちの様子からも分かった。大好きだった教会も、初めてできた友達も、よく遊んだ公園も、昨日まで当たり前のようにあった日常が突如消え去ることに私は深い悲しみを覚えた。移動の車の中で、雨の音にまぎれてひっそりと泣いたことは、今でも忘れられない。

明と暗がない交ぜになった激動の一年は、強弱を付けて舞い踊る小フーガト短調とどこか重なる。懐かしくも悲しい思い出を共有してくれることが惹かれる理由だと思っていたが、それだけではないことに後に気が付いた。嬉しいことや楽しいことばかりではない人生の中で「あのときの経験があったから」と乗り越えられるほどの強さを、この曲は与えてくれる気がするのだ。今見ている景色も、今そばにいる人も、いつかは消えてしまうかもしれない。そう思うと、もっと日々を大事にしていこうという気持ちにもなれる。

小フーガト短調は穏やかに着地するような旋律で幕を閉じる。ドラマで言えばハッピーエンドだ。そこにたどり着くまでに、私の物語はまだまだ終わらない。

曲名 小フーガト短調
作曲 ヨハン・セバスティアン・バッハ

審査員特別賞

諏訪内晶子 バッハ無伴奏ソナタ第一番を聴いて

秋山 道夫

諏訪内とは以前都郊外のホールでのリサイタル終演後少し話をする機会を得た。舞台上のクールな感じとは異なり明るい快活な感じをうけた。伴奏のイタリアの名ピアニストエンリコ・パーチェと面識があり挨拶をしているところに「あらお二人は？」と来られたのだ。その彼女の新録音それもバッハ無伴奏。これは聴かずにおられない。そして聴き終わって浮かんだったバッハ演奏についてのあれこれを綴ってみたい。

ソナタ第一番最初の曲アダージョの厳粛な響きにはいつも居住いを正される。この冒頭の楽章は第一番ソナタの開始であると共に無伴奏ソナタ、パルティータ全六曲の長い旅の始まりを告げているように思われてならない。

諏訪内はたつぷりとしたテンポで非常に美しく弾く。余りの美しさに何か哀しみを感じるほど。美しさの極まるところ哀しみに通じるのだろうか。そして豊かな歌。世界的ヴァイオリニスト堀米ゆず子は師の江藤俊哉から「バッハはメロディーの作曲家ですよ」と言われたことを彼女の素晴らしい無伴奏全曲CDのライナーノートに書いておられる。諏訪内の師も江藤俊哉。彼女も師から同じように教えられたのかしら。新しく手にした楽器の個性もあるのか地味とまでは言えないが決して華やかではない太くて豊かな音で奏でられる歌にすっかり魅了された。彼女の演奏は敬虔な神の信徒であるバッハの宗教的、精神的側面よりも、生々しい感情豊かな人間的側面を私に感じさせる。勿論彼女は現代を代表するモダンで知的な名手。バッハの精神、バッハが作曲時そうしたのであろう神との対話を充分感じ取っているであろうことはその緊張感を湛えた丁寧な演奏から伝わってくる。録音会場が教会であることはそれを物語っている。しかし演奏から受ける印象はスピリチュアルであることより以上にエモーショナルなものとして私の心に迫ってくる。豊かな歌、哀しみそして余韻の残る情感。バッハの心の動きが見事に表されたアダージョと思う。教会内で神に見守られながら自由に人間の内面を歌う趣を感じる。人間バッハ像を諏訪内はその演奏で見せてくれたのではないだ

ろうか。

宗教的精神、信仰心から自由なバッハ演奏。それはカラヤンのブランデンブルグ協奏曲最初の録音を想起させた。教会音楽の大家バッハの演奏は従来厳粛で思索的、何よりも宗教的、精神的深さが求められた。しかしカラヤンのバッハは愉悅的で現世的、如何にも音楽する楽しみに満ちていた。当代最高の天才指揮者は伝統に縛られずバッハの人間手見側面を示したのだった。モーツアルトと同じザルツブルク生まれ。ドイツ、オーストリア音楽の伝統を一身に背負った彼がバッハ演奏のトラディショナルな側面を知らぬわけではない。彼の柔軟な資質は音楽の世界をより豊かなものにし、彼をして最も偉大な音楽家たらしめたものだと思う。

又、五嶋みどりの近年のケーティンでの無伴奏全曲録音（ブルーレイディスク）も思い出していた。同じくソナタ一番アダージョで胸に迫り涙をこらえられなかったのだ。ケーティンはバッハが宮廷楽長として数々の名作を創作した場所。無伴奏ヴァイオリンソナタ、パルティータ全曲もここで完成したと伝えられる。その謂われある場所に赴いての演奏は文字通りバッハと、神との対話に聴こえた。伝統的とか今日的とは関係なく一人の偉大なヴァイオリニストが全身でバッハと対峙している姿に自然と涙がこぼれたのだ。映像で鑑賞したことも感銘に寄与したと思う。それに比し諏訪内の演奏は歌心溢れ美しく、スケールの大きな客観的な演奏に思われた。しかしそれは一面的な印象であった。彼女のヴィルトウオーズとしての側面の凄さ凄まじさを最終楽章プレストで思い知らされる。なんと謂う腕の冴え。今まで抑えていた感情、ヴァイオリン技巧の全てをものすごいテンポで呈示する。まさに息を飲むプレスト。小澤征爾が武満徹との対談で師のカラヤンから教えられたという言葉を直ぐ思い出した。「最後の土壇場に來たら全精神と肉体をぶつつけろ」。まさに諏訪内は最後のプレストで全てをぶつつけたのだ。聴いていて哑然呆然。リスニングルームで一人拍手をした。日常生活が豊かに満たされるとはこういうこと。諏訪内とバッハに大いに感謝した。残りの五曲が本当に楽しみである。

曲名 無伴奏ヴァイオリンソナタ第一番
作曲 ヨハン・セバスチャン・バッハ

優秀賞

行進と踊りの融合ロマジック

後藤 純子

「遡ること四十年、いや五十年近い昔のことか。小学生だった私はレコードプレイヤーを動かし、一人で音楽を聴いていた。音源は、LPレコードが三十枚程セットになったクラシック音楽全集だ。子供の頃はクラシック音楽にあまり興味はなかったが、レコードプレイヤーの扱いを覚え、自分でレコードに針をのせて聴くのが面白かった。音楽の授業やテレビ番組などで有名なクラシック曲を聞き知ると、自宅の音楽全集からレコードを捜し出して聴くのが楽しみでもあった。

その日は組曲「アルルの女」を捜し当てた。きっかけは、どこかで聞いたフルートの美しい旋律だ。手がかりは、「アルルの女のメヌエット」というキーワードである。この組曲には第一と第二があり、件のメヌエットは第二組曲の中に入っている。メヌエットの部分だけで十分だったが、私は律儀に、第一組曲の冒頭から第二組曲の最後まで通して聴いてみた。そうして最後に流れた曲が、第二組曲の「ファランドール」だ。

「ファランドール」の冒頭は、第一組曲の「前奏曲」と同じ旋律で始まる。「前奏曲」より多くの楽器が使われ、金管楽器の音色も高らかに、一層荘厳な演奏だ。レコードの解説によると、南フランスのプロヴァンス地方の民謡「三人の王様の行進」のメロディーをとったものだとか。それは子供の私にも理解できた。いかにも王様が堂々と歩く姿をイメージした音楽だ。解説を読みながら（うんうん、分かるよ。）と一人で頷いた。

曲が進むと、突然、タタタタ・タタタタ・タタタタ、とテンポの速い小太鼓の連打が始まり、ピッコロが軽やかなリズムにのせて歌い出した。ファランドールとは、大勢が手を繋いで輪になって踊るプロヴァンス地方のダンスだという。たぶんこのピッコロの旋律に合わせて踊るのだろう。先ほどの重々しい音楽から突拍子もない変わりように面食らったが、聴いていて楽しいので、座りながらもつい音楽に合わせて体を動かしてしまう。

そうかと思うと、また元の重厚な旋律、王様の行進に切り替わる。このと

き私の頭の中には、王様が率いる楽団と、小太鼓率いるピッコロ楽団の光景が浮かんだ。二つの楽団は競い合い、相手を遮って邪魔しながら演奏する。どちらも自分達の音楽の方が優れている！と主張して譲らない。いや、このままでは收拾つかないではないか。一体最後はどうするつもりなんだ。私は音楽の終わらせ方を心配し始めた。

（最初に流れた旋律に戻って、王様の重々しい行進曲で終わり、かな？）

（それとも小太鼓とピッコロの軽やかな踊りでおしまい、なのかな？）

そんな心配をよそに、この曲は堂々のフィナーレを迎えた。荘厳な王様の行進と、軽快なピッコロの踊りの旋律が、同時に、より高らかに合奏された。これは予想外の展開だ。全く別物と思われた二つの旋律は、同時に演奏するとぴったりに合うように聞こえた。まるで最初から一つの音楽だったかのよう

に。
（えっ、どうして？）間もなく謎が解けた。王様の行進の旋律は、短調から長調に変わっていた。だから、もう一方の踊りの旋律と重ねても、音が合っていたのだ。この転調によって、荘厳な中にも悲壮感漂う王様の行進は明るい響きに変わり、最後は燦然と輝かしい大合奏となり華々しく終了した。
（すごい、すごい、すごい！）

聴き終わった直後は、これ以上の感想は出てこなかった。子供だから仕方がないが、大人になった今でも、このときの感動を表現するうまい言葉が見つからない。「ファランドール」は三分四十秒程の曲だが、その短い時間で、どきどきわくわく、最後にあっと驚くどんでん返しのドラマを見たような充実感、と言えどご理解いただけるだろうか。

最近になって、とある音楽番組で「ファランドール」が解説された。原曲はビゼーが劇音楽として作ったもので、今ではその劇は上演されていないという。後に友人のギローが編曲し、組曲としたものが現在広く演奏されているのだ。最後の部分で「三人の王様の行進」を転調したのは、作曲家ビゼーではなく編曲者ギローのアイデアだそう。もっと詳しく知ろうと、改めてインターネットで検索して驚いた。「ファランドール」を解説し、魅力を語る記事のなんと多いことか！昔、子供の私がLPレコードで経験したように、今も多くの人達が様々な音源からこの曲を聴き、同じように心動かされていて



作曲名
「アルルの女」第二組曲より「ファランドール」
ビゼー

る。そう思うとちよっと嬉しい。

優秀賞

ディーリアスの音楽を聴くことについて

神原 裕之

イギリスの作曲家ディーリアスの音楽は、クラシック音楽を聴き始めた頃から好きで、よく聴いていた。「よく」というのがどの程度の頻度かは人によってまちまちだとは思いますが、例えば今でも毎日のように聴いている、僕が愛してやまないシューベルト、ブルックナー、ブラームスあたりに比べると、正直なところその頻度はかなり落ちる。とはいえ、折につけ頭の中でその音楽は流れているし、いつもどこかにその場所が用意されている音楽、という言い方はできると思う。

ディーリアスの音楽は水彩画に例えることもできるような淡い色彩を持つ。それもメンデルスゾーンのように淡くてもくつきりとした輪郭を持つものではなく、音と音が重なり合った時にその境目が滲んでいるような、また、ドイツ音楽のように地に足がついたものではなく、（フォーレとまでは言わないが）少し地面から浮遊してこれまた淡い光を放っているような音楽であると思う。

一般的には聴いていてあまり元気が出るようなものではないのだけれど、いざ聴いてみるとその音楽がじつくりと体全体に広がっていくような気がする。ことがある。渴いた体を潤していくような。ああ、僕は本当にこういう音楽を欲していたのだ。と心の底から思えるような、そんな音楽だ。

「元気が出るものではない」と書いたけれど、それでは少々語弊があるので補足すると、未来に向けて希望を持つものというよりは、来し方を振り返り人生に思いを巡らせるような音楽だと言えれば近いだろうか。

ところで、そのディーリアスだが、令和の世の現在―あくまで僕の肌感だが―決して人気があるとは言えない気がする。モーツァルトやベートーヴェンなど、ドイツ・オーストリア系のものと比べるべくもないことはもちろん、ディーリアスと同じイギリスの作曲家であるホルストやエルガーと比べても明らかに分が悪い。しかし、僕がディーリアスを聴き始めた1980年代の初めの頃は、もっとよく聴かれていたように思う。ディーリアスの代表曲

と言えば、今も昔も「春初めてのカッコウを聴いて」だと思うが、当時はホルストの代表曲である「惑星」よりもこの「カッコウ」の方が出ていたレコードは多かったはずだ。「惑星」は50分を超える大曲だし、「カッコウ」は5〜6分の小品なので、比べられない、と言われればその通りだけれど、「カッコウ」の場合はだいたい他のディーリアスの曲と一緒にカップリングされて一枚のレコードになっているのが普通だったから、強ち無理やりの比較でもない気がする。

では、どうしてこうなったのだろうか？

残念ながら昨年休刊になってしまったが、「レコード芸術」というクラシック音楽好きであれば恐らく一度は皆お世話になったことがあると思われる音楽雑誌があった。ご多分に漏れず僕もずいぶんお世話になり、レコードやCDの情報はもとより、音楽に関する知識もほとんどこの「レコ芸」から学んだと言っても過言ではない。

創刊以来70年の雑誌の歴史には、あらえびす先生は言うに及ばず、多くの評論家や音楽家が健筆をふるっておられたが、その中に三浦淳史という方がいらした。氏の博識ぶりは多岐に亘っていたが、特にイギリスの作曲家や音楽家に関する解説やコラムは白眉だったし、中でもディーリアスの音楽とそれに関わる―例えば指揮者のビーチャムのような―音楽家への眼差しは温かく、そして深かった。僕もそうだが、氏のディーリアス愛の強さにほだされて、その音楽に結果的にハマりこんだ音楽好きは数多くいたと思う。それが当時の日本におけるディーリアスの音楽の受容の歴史だと、僕は大袈裟ではなくそう信じている。そして氏が亡くなった20世紀の終わりを境に、急激に聴かれなくなったことは決して偶然ではないと思う。

音楽を聴くことはとても素晴らしい。そしてその素晴らしさを誰かに伝えたいとも思う。ただそれは言うまでもなくとても難しい。ただ文章が巧みであれば良い、というものでは決してあるまい。そこには音楽への言ってみれば無償の愛が不可欠だ。そしてその時初めて、その音楽の「使徒」としての資格が生まれるのだと思う。そして、そうした使徒となった人たちの言葉は、音楽を愛するすべての人たちにとってかけがえのない道標となる。

ディーリアスの音楽は今でも静かに心の中に、体の隅々にまで拡がってい

く。

ディールリアスの音楽がこれからも人の心の中に「特別な場所」として用意されていれればいいな、と思う。

曲名
作曲

春初めてのカッコウを聴いて
フレデリック・ディールリアス